

令和6年度 学校関係者評価報告書

評価点

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
()は令和5年度評価		E	判定できない

学校(園)名： 附属幼稚園（東広島園舎）

分野	重点目標 (評価項目)	年度計画(中期計画・ 中期目標)との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
					達成状況, 改善策	評価	意見・理由	評価	
教育課程・学習指導等	教育課程(保育内容)事業	① ESDの観点を取り入れ、グローバル人材に求められる資質・能力の基礎を育成する質の高い教育課程の開発を進める。	ESDの観点を取り入れた保育の実施のために保育指導案の作成及びエピソードを記録する。そのためにドキュメンテーションやポートフォリオの活用を進める。	〈指標〉園内研究日、月案検討日、職員会議での検討を行う。保育の記録の評価(保育者、保護者)を行う。 〈判断基準〉ESDの観点を取り入れた保育記録についてのアンケートの肯定的評価が80%以上。	・定期的に園内研究日等を設け保育指導案や月案等の検討を行った。 ・ポートフォリオやドキュメンテーション等の保育記録については保護者から100%の肯定的評価があった。 ・グローバルデーについては、年少1回、年中2回、年長機会を捉え実施した。また、オリンピック・パラリンピックをきっかけとし、自国にも関心がむき、諸外国との比較を楽しむ姿があった。視察・訪問者にはその都度園の保育・教育についてのアンケートを実施した。保護者は97%の肯定的理解があった。	A (A)	ESDを取り入れた保育を実施するために保育指導案や保育記録の工夫が見られることは、評価できる。ドキュメンテーションやポートフォリオの活用など積極性を感じる。また、オリンピック・パラリンピックを身近なものにさせるなど、子どもたちに多文化を知らせる機会を重ねられたことは実績として評価できる。	A	①教員が子どもの生活や遊びの中で、ESDに関する姿の芽に気づき、保育カンファレンスで共有し、保育指導案の検討、実践に繋げる。ドキュメンテーションやポートフォリオでは、子どもの「育ち」や「学び」を分かりやすく記し、保護者の方への園での教育活動に対する理解に繋げる。 ②年少・年中クラスにおいてグローバルデーの実施を計画的に行い、多文化に親しむ知る機会を保障する。年長クラスではクラスの興味・関心から多文化に関わる活動を計画、実践する。また、広島大学と連携し、日常的に関わるなかで多文化や日本の文化にふれる機会を保障する。
		②グローバルデーでの異国の文化や言葉に触れる体験から、国際理解の素養を養う教育の実現に努める。	多文化理解に繋がる活動を積極的に推進する	〈指標〉グローバルデーの実施により多文化理解が深まる。 〈判断基準〉子どもの姿を通しての、保護者の80%以上の理解があるかどうか。					
教育研究等	研究開発事業	【研究校としての研究実施・推進と公開】	本年度の研究課題に沿った研究の取組による成果と課題のまとめ、次年度へ広げる。	〈指標〉幼児教育研究会を実施し、本園の研究実践のあり方を知ってもらう 〈判断基準〉研究会の参加者数80人以上、研究会参加のアンケートで肯定的評価80%	・研究会参加者181名。参加者に、アンケートを行い90%以上に肯定的な評価を得た。 ・研究報告の内容について、わかりやすいと89%の回答があった。今後も一般化できる研究、わかりやすい提示を心がけていく。 ・学部・附属共同研究は、今年度より「幼稚園における文化多様性を尊重する態度を育む交流活動の開発」というテーマを設定し、自分や人のよさ、可能性が分かり、多様な考え方を楽しみながら自己選択できる子どもの育成を目指した交流活動の開発研究を行なっている。	A (A)	全国から多くの参加者があり、本幼稚園実践への関心が高いことがよくわかった。この4年間、外の環境だけでなく園内での保育実践にも注力しているということの成果が現れていることであると考え。今後も、多くの保育者、教員に幼稚園の自然環境や活動だけでなく、園内の保育活動も見ってもらうように努めてもらいたい。幼稚園の実践が他の保育所幼稚園などにどのように波及するのか考えて研究公開をしてもらいたい。また、大学・附属学校共同研究や科研への申請、保育学会でのポスター発表など前向きな姿勢がうかがえる。評価についてテキストマイニングツールを用いたり、GRITスケールのような評価基準を用いて客観的な評価につなげるようにしてみてもどうか。	A	研究大会では、本園の日常の教育活動を見てもらうことで、参加者がそれぞれの保育・教育実践に活かせるように分科会・講演の内容を検討する。学部附属学校共同研究は引き続き大学教員と連携しながら進めていく。また昨年度までの研究を保育学会等で発表し参加者の意見等から今年度の研究の進め方の参考にしていく。 科研の採択に向けて、各教員の研究分野を見直し、計画的に取り組む。
			大学・附属学校共同研究プロジェクトに応募し、幼年教育研究施設との研究をすすめる。科学研究費助成事業(奨励研究)への申請。	〈指標〉幼年研究教育施設との共同研究の応募をする。科研が採択される。 〈判断基準〉共同研究の応募。科研採択1件。	・2025年5月に行われる保育学会において、共同研究のこれまでのまとめをポスター発表し、参加者と意見交換をする。				

社会連携・社会貢献活動等	社会連携・貢献, 子育て支援事業	【地域との連携】	地域の小学校との連携を進める。	〈指標〉 地域の連携(附属三原小学校や西条小学と交流の実施を行う。 〈判断基準〉 幼小の教員同士の連携を実施したか。	・附属三原小学校と西条小学校との交流を実施した。担任同士の活動内容のやりとりや、オンラインでの子どもの交流もできた。また、保護者の肯定的な評価も高かった。	A (B)	特定の小学校に子どもたちが進学するわけではないので連携の保障の難しさもあるかもしれないが、積極的に交流を進められ評価できる。引き続き実施してほしい。	A	三原園舎と教員同士の研修を行う。子ども同士の交流では、時期や内容を検討し年に3回行う。また年中クラスもオンラインでの交流を行えるよう計画する。 幼小連携において、教員は幼小教員合同研修に参加し、地域の小学校の実態を踏まえ連携する。その上で連携の内容を検討する。
		【社会貢献】	国内外の教育関係参観者に保育・施設の公開(動画も含む)	〈指標〉 国内外の保育関係サイトに、動画などを提供する。また教育関係者の参観希望者に保育・施設の公開(アンケート)を実施する。 〈判断基準〉 参観者の感想や意見に肯定的評価が80%以上。	教育関係者の視察希望は21件、研究協力18件であった。海外では、中国、韓国、フィリピン、インドネシア、アメリカ等からの視察があった。視察後のアンケートから園の環境や子どもへのかかわりに対して肯定的な評価が示された。	A (A)	附属幼稚園の外国の教育関係者との交流は、日本の就学前教育の質向上に貢献している。	A	引き続き、地域社会に対して幼児教育の重要性を伝える。国内外の教育関係者に保育・施設の公開を実施する。アンケートを行うことで参観者の学びや意見を視覚化し、園の教育活動の参考にする。
		【子育て支援】	園庭開放により、地域の住民、子育て世帯への豊かな自然環境で過ごせる機会の提供	〈指標〉 園庭開放の実施(年5回程度)。数回、子育て支援事業と連携をして行う。 〈判断基準〉 園庭開放実施の実績(参加者数が30人以上)参加者の感想や意見に肯定的評価が80%以上。	定期的に園庭開放を実施した。園内向けの園庭開放は13回実施。延べ230人参加。園外向けの園庭開放は9回実施。延べ126人参加。満足度の高い園庭開放になった。今後も続けて実施していく。	A (A)	子育てに不安を感じる保護者のよりどころとして園庭開放を続けるべきである。オープンキャンパス的な要素も入れて、園の魅力発信として、園児獲得の手段にする。	A	園庭開放の意義を整理する。猛暑は避けた上で日数の確保を行う。「在園児対象」「外部・未就園児対象」に加え、在園の保護者と外部・未就園の保護者が交流できる場を設けることで、引き続き子育ての悩みを話せる場という役割も果たせるようにする。新しい試みとして子育て相談や情報を提供できるような機会を園が外部機関と連携し年に6回計画する。
			学校評議員、学校関係者評価委員による評価	〈指標〉 学校評議員会、学校関係者評価委員会の開催 〈判断基準〉 各委員の指摘、評価により、園の活動に肯定的評価が80%以上。	学校評議員会、学校関係者評価委員会の助言により園の運営の見直しを行った。その結果、学校運営にかかわって保護者アンケートでは本園の教育活動に96%の満足度が得られた。	A (B)	園の職員数は多くないため、アイデアの広がりには限界があると思われる。しかし、外部からの意見を求める中で、よりよい園運営ができていると感じた。	A	学校評議員会の意見を手掛かりとして、今年度の園務分掌を再検討する。特に安全面、園児獲得、働き方に関する事項を教職員で共有し、新たな目標を立て実施していく。

学校経営・安全管理等	学校運営・改善事業	【幼稚園運営にかかる課題についての整理, 検討, 対応】	内部評価と保護者評価の実施	〈指標〉 教職員の気づき, 意見が出やすい職場環境の構築を目指す。また保護者アンケートを実施する。 〈判断基準〉 教職員、保護者アンケートの肯定的評価80%以上。	教職員の気づきは個々には出ていたが、互いに出し合うという雰囲気を作ることは難しかった。今後は意見が出やすい職場環境の構築をめざし、よりよい関係づくりをしていく。 保護者アンケートの肯定的評価90%以上。	C (B)	保育者間には話しやすい雰囲気があると感じている。自由に語り合う雰囲気があり、課題解決に向けて前向きにすすめられていると思う。ただ、自己評価が「C」であり、今後は意見を出やすくするため、時間的な面、空間的な面を踏まえて、具体的な取り組みの検討をしてはどうか。	A	教員全員で、園が目指す保育について保育終了後、保育カンファレンスで話し合う。教職員の誰もが意見を出せるよう、管理職や主幹がその場の雰囲気づくりを行い、個々への配慮を行う。特に非常勤講師は保育活動外での時間が保障されにくいとため、月1回の行事等話し合い等を活用して話し合いに参加してもらう。
			危機管理・安全管理意識の向上と関係マニュアルの整備	〈指標〉 危機管理、安全管理に関する意識確認、感染予防対策 〈判断基準〉 各訓練、職員による安全点検の100%実施。マニュアルの改善。 過去の事故・怪我の状況を見える化して対応策を実施する。	各種訓練(1)火災避難訓練(2)地震避難訓練(3)不審者対応避難訓練(4)園児行方不明訓練は予定通り実施できた。 安全点検については、天候などにより延期することがあった。台風の後の見回りなど臨機応変さを求められるものについて個別に動いていたが、広範囲にわたるため全体で動くことを今後していくと同時に、森の管理について業者に定期的に入ってもらふことを検討している。 園内で起こった事故・怪我の状況を見える化することで、怪我を減らすことができた。	A (A)	事故ケガの「見える化」がとても有効と感じた。広大な敷地の安全管理は大変と思うが、園児の安全のため、教員の安全管理の意識向上に努めてほしい。	A	引き続き、事故・ケガの「見える化」を実施し教員が危険箇所やケガの多い時期等を意識できる環境を構築する。ヒヤリハット用紙に記入された事項を共有し、子どもの安全確保に努めていく。併せて、対処方法や気付きを追加できるようなシステムを検討する。また、保護者に園環境の安全、それに対する教員の意識なども伝えていく。
			教職員の適正な労働環境の見直し・改善	〈指標〉 適正な勤務時間の厳守, 面談を適宜行う。 〈判断基準〉 個々の超勤が月に38時間以内を80%以上。	個々の超勤は月38時間以内に収まっている。 ペーパーレス化が時間短縮に向けて、だんだんと有効的になってきている。 仕事が一極集中することへの対策としてできるだけ割り振りをと考えているが、難しさを感じている。	B (B)	働き方改革について、今後はICT利用も想定し、それに委ねられる部分の洗い出しを行ってもらいたい。超勤の数字はもちろん意識すべき大切なことだが、一人一人の「やりがい」を大切にするため管理職面談などよいと思う。	B	各自が「やりがい」を感じながら取り組めるよう、保育、研究、カンファレンス等での思いや実際に管理職や主幹が把握する。ICTの利用について内容を精査し働きやすさを生み出していく。
	【基盤整備】	保育活動が安全でかつ効果的に実践できるよう、必要な施設や環境の整備に努める。	〈指標〉 園舎内の安全環境整備の確認 〈判断基準〉 営繕要求をもとに大学と連携しながら、環境整備に努める。	園舎内の安全環境整備については定期的に安全チェックを行うと同時に、気づきは営繕要求に反映できるよう努めている。	B (B)	保護者から、園の駐車場から歩道へ出る通路が危険なので改善してもらいたいという意見があった。 営繕実現のためには、このような声が要求の根拠になると思うので、今後も保護者からの声を聞き取るようにする。	B	施設の老朽化(水道管や壁など)した部分について注意を払う。子どもたちの安全確保のため、営繕要求の優先順位を管理職、養護教諭と考え、改善に繋げていく。	

注) 太枠内は、学校関係者評価委員会が記入する。